

Title	ウィリアム・エーベンシュタイン著『現代のイズム』： 共産主義、ファシズム、資本主義、□會主義
Sub Title	William Ebenstein : Today's isms : communism, fascism, capitalism, socialism
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1957
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.30, No.11 (1957. 11) ,p.66- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19571115-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のとして残されたままであり、問題解決というよりは、その指摘にとどまつていることは少なくない。犯人の心理を究明するに當つても、すでに詳しく分析された殺人犯を引用するにとどまらず、更に將來の事例敘述によつて性格學的側面に對し一層の根據づけが加えられねばならぬであらう。

少年の犯した殺人について、著者は多くを語つていないけれども、將來はこの缺陷を満さなければなるまい。かくして始めて、ロンブローゾのいわゆる「生來犯人」なる根本命題の修正がなされるであらう。ロンブローゾにあつてはいわゆる「隔世遺傳的」根本衝動といわれたものを、ヘンティッヒは「太古的」根本衝動と唱道している。彼によれば「生來的」殺人犯には、この根本衝動が必然的合法則性を以つて生じるといふ。

本書は、著者自體が謙虛にいつている如く將來の「殺人原論」の前提研究である。だが、クリューガーがたくみに表現している如く、「これは單なる基礎研究ではなく、顧慮に價する建造物である。これの細部にわたる室内裝飾こそが、將來の研究に委ねられた課題であらう。」

本書は科學的に啓發せられること大であるにとどまらず、深い人間智、心理學的洞察の寶庫である。實際裁判にたずさわる者、犯罪豫防、捜査にたずさわる者すべてが、心して讀むべき本である。

我々は、深い敬意と感謝とを著者に捧げるとともに、著者が一層久しきにわたる生命に健康に恵まれて、刑事學のために多くの業績を残されることを心から祈つてやまない。

本書に對してはベルン大學の Germann 教授が Schweizerische

Zeitschrift für Strafrecht 72. Jahrg. Heft 1. S. 85 ff. (第一卷と併せて書評をしている)で、前記ハンブルク大學のクリューガーがヘンティッヒに献呈した龍掲 Monatschrift S. 121 ff. (刑罰)をシーベルツ教授が書評している。S. 126 ff.)で、それぞれ紹介、批評を行つてゐる。(一九五七・九・二七、セイロン島沖で稿了) (宮澤浩一)

William Ebenstein :

Today's Isms

—Communism, Fascism, Capitalism,

Socialism—

Third Printing, 1955, X, 191 pp. Prentice-Hall.

ウイリアム・エーベンシュタイン著

『現代のイズム』

— 共產主義、ファシズム、資本主義、社會主義 —

—

著者ウイリアム・エーベンシュタインについては、ここにいうまでもなく、プリンストン大學政治學科教授として現在アメリカにおいて屈指の優れた政治學者であるのみならず、ユネスコ・プロジェクト

クらの Method in Political Science のディレクターとして國際的にも大いに活躍をされている。彼は特に政治思想の研究者として著名である。これまですでに *Modern Political Thought: The Great Issues; Great Political Thinkers: Plato to the Present; Man and the State: Modern Political Ideas* などが出版されていることは周知の通りである。なお最近手にしたばかりであるが、*Political Thought in Perspective, 1957* という書がある。この近著も特徴のある政治思想史であつて、別の機會に筆をとりたいと思つている。

さて、ここに紹介しようとする *Today's Issues* は、著者が最も關心を寄せている現代における政治思想の問題と取り組み、われわれに洞察力を興えようとするものである。著者のまえがきに示されているように、本書は、共産主義およびファシズムを全體主義の側に、資本主義および社會主義を民主主義の側に、それぞれ對峙させて論究している。勿論、現代世界にはその他にも多くの思想が存在している。しかしわれわれにとつては、われわれの時代の世界の運命を形造つている以上の四つに範疇化されるイズムに注目し、一定の批判の準據によつて、その問題状況を見つめることが緊急なことであらうと思われる。

本書のアプローチの仕方についてみると、エーベンシュタインは、統治機構、經濟組織というような特殊なアスペクトを通じてではなく、生活様式 (*the way of life*) という概念を通じて問題の解明に向つている點に注目しなければならない。すなわち、「全體主義とか民主主義とかは、社會的・政治的・經濟的な特定の組織より以上

のものなのである。それらは、人間性に關して區別された反對の概念に基づく矛盾した信念や價値をもつた、二つの眞向から對立している生活様式である。それ故に、現在の世界的危機の範圍や深刻さは、ただ單に政治的もしくは經濟的な觀念や實踐の相争う結果としてだけではなく、社會生活全體を取り巻いている思想と行動の二つの様式のあいだの闘争として、これを感知することによつてのみ充分に把握されうるのである。」

こうした視點から、本書は二部に分け、第一部は「全體主義的生活様式」とし、第一章「全體主義的共産主義」、第二章「全體主義的ファシズム」より成り、第二部は「民主主義的生活様式」とし、第三章「民主主義的資本主義」、第四章「民主主義的社會主義」より成つている。そしてそれらは更に全部で三十四の小節に細分されている。以下、著者の所説の順に紹介の筆をすすめてみよう。

二

第一章 全體主義的共産主義 (*totalitarian communism*) は、マルクス主義の根本的な理論の敘述からはじめられている。すなわち、經濟史觀、社會變動論、革命理論、資本主義の矛盾に關する經濟學說などのオーソドックスな見解、およびレーニンンのプロレタリアートの前衛理論などが明快に説明されている。次いで、スターリン主義と今日のソヴェト政策について検討が加えられている。著者にしたがえば、現代世界に横わる四つの基本的な緊張の考えに、そのストラテジーは成立しているのである。(一) 到るところでの資本家とプロレタリアとの緊張、(二) 帝國主義國と植民地との緊張、(三) 敵

對する帝國主義諸國間の緊張、(4) 共產主義國と資本主義國との緊張、がそれである。

眼を轉じて、ソヴィエトの社會・經濟的變化をみると、一九二八年にはじまるスターリンの經濟五カ年計畫によつて、共產主義の原理が實踐的に打ちだされてきた。その企圖するところは、第一に迅速な工業化と、第二に農業の集團化とである。後者の政策は、二十五年を經過した今日でも、國民の生活水準を高めることには失敗している。しかしながら、工業化のための勞働力を解放し、戦時中は集團農場がゲリラの抵抗の中核となつていたという點からは、成功を収めたといふことができよう。前者の政策は、とりわけ、戰爭をおこなうための國家權力の増大に向けられており、それに對して拂う國民の犠牲は大きい。ソヴィエトにおける經濟的變化は決して社會的正義や平等の問題を解決しているとはいえない。特にわれわれは、ソヴィエト社會における甚だしい階層化の傾向に注意しなければならぬであらう。かかる傾向は、ソヴィエト連邦のみではなく、チェコスロヴァキア、ポーランド、東ドイツでも同様であり、黨指導者や政府高官の經濟的擄取に對する勞働大衆の反抗の根源となつてるといわれている。かくして、「現在、共產主義の經濟改革の經驗が示すところによると、根本問題は政府が生産手段を所有するかどうかということではなく、誰が政府を所有するかということなのである。」

更にエーベンシュタインは、共產主義の強味と弱點、現在の戰爭と平和の問題を論じているが、重要なことは、世界の分裂は資本主義と社會主義というかたちで理解すべきではないということである

る。それは、侵略的征服をもくろんでいる國家と眞實に平和を維持しようとする國家との問題であるからである。經濟體制がどうあろうと、世界平和の問題や自由を求めんとする國々の權利には關係はない。かくて彼の結論は、「もし自由諸國が自らと共產主義世界の陰謀とのあいだに鋭く一線を劃するとすれば、人間の自由對隸屬と奴隸化という古い言い慣わしによつて、問題を提起しうる。……もし自由世界が、現在の危機の主要な問題として、人間の自由對共產主義的侵略の闘いに専心するようになれば、その闘争の究極的な歸結には何の疑いもない」と。

三

第二章 全體主義的ファシズム (totalitarian fascism) において、著者は先ずファシズムの生成過程の社會的背景を探索し、その心理的根底を究明していく。ここには、全體主義への心理學的アプローチとして、すでにアドルノ等やフロムによつて試みられた研究成果が極めて要領よくまとめられている (cf. T. W. Adorno et al., *The Authoritarian Personality*, 1950; E. Fromm, *Escape from Freedom*, 1941)。

ところで、われわれが共產主義とファシズムとを比較してみると、それらが同じく全體主義的というエピテートを附されているにもかかわらず、根本的に相違している點に着眼してみる必要があるであらう。われわれの經驗が教えていることは、共產主義が、大方、民主主義以前の、そしてまた近代産業の發達以前の社會の所産であるのに反して、ファシズムは、民主主義をいくらかでも體驗し、

しかも高度に發展した近代テクノロジーをもつてゐる國々に典型的に發生したという事實である。これを要するに、ファシズムとは *postdemocratic* であり *postindustrial* であるということ、われわれは指摘しうるのである。したがつてまた、近代産業のもたらした社會・經濟的な問題狀況に對して、共產主義は「後進社會を産業化していく」方法において、ファシズムは「産業的により先進している社會内部の葛藤を解決していく」方法において、いづれも全體主義的であるといえる。

ファシズムの展開過程は、その社會的基盤として、大産業家、土地所有者、中産階級、軍人などの支持に訴えていつたのであつたが、こうした社會集團のすべてには、近代産業化の進展とともにそれにまつわる經濟的不況の結果として、一つの共通分母が見出されよう。欲求不満 (Frustration)、怨恨 (Resentment)、不安定 (Insecurity) といった心理的態度がそれであつて、それらは容易に憎悪とか侵略に轉化させられ、内外の實際あるいは假想の「敵」へと向けられていく。こうした傾向は、特に日本人やドイツ人の如くにファシズムに感應しがちないわゆる「權威主義的パースナリティ」をもつものに顯著に露呈されている。しかしここに注意すべき點は、全體主義の心理學的アプローチは、民主主義的な文化型におけるパースナリティの要因分析には價值ある貢獻をなしているとはいへ、ドイツ・日本・中國などに發生した全體主義を説明するに當つては、その方法を以てしたのでは不十分であるということである。エーベシシュタインの述べているように、「全體主義が大衆運動の大いさをもつてあらわれているところでは、民族の大きな社會的・經濟的

・文化的な諸勢力や傳統の分析が本筋である。」

次いで、ファシズムの教義および經濟體制が取り上げられている。「ファシスト宣言」というようなものはなかつたが、われわれは次の六つの原理を列擧しうる。(一)理性への不信、(二)基本的人間の平等性の否定、(三)虚偽と暴力に基づく行動のおきて、(四)エリートによる統治、(五)全體主義、(六)人種主義と帝國主義、(七)國際法および秩序への反對。こうした生活様式を備えたファシズム運動が一九三〇年前後にヨーロッパや日本を風靡したのであつたが、第二次大戰の終結によつて、一應その脅威も拂拭されたかに見える。だがそれは永遠に跡を斷つたということができようか。それはまだ、フランコのスペイン、ペロンのアルゼンチンなどに殘存している。しかし現在、一層危険なことはその外部からの攻撃よりも、共產主義との冷い戦争がまたもやファシズムの復活を促すのではないかという疑念である。しかもそれがデモクラシー自體のうちに。すなわち、「アメリカ合衆國の如きデモクラシーにおける危険は、ドイツ、イタリ、スペインのような型のみならず、ファシズムではなくて、前ファシスト的な、また親ファシスト的な態度によつて、民主主義的な慣習や制度が内部的に知らぬ間に徐々に侵蝕されていくことなのである。」

四

「自由國家では、朝まだき扉にノックが聞えると、牛乳屋がやつてきたことを意味しよう。全體主義國家では、その同じノックが、秘密警察がきて、人を家庭や家族から攫み取り、彼を投獄、追放し、もしくは裁判も適法の手續きもなくして刑を執行してしまうことを

意味するのだ。」デモクラシーの概念は、何よりも先ず、恐怖からの自由である。エーベンシュタインは、第三章 民主主義的資本主義 (democratic capitalism) において、民主主義的生活様式、その政治的な諸条件、心理的根底を精緻に論じて、全體主義諸國がデモクラシーを標榜しつつも、それと截然と區別さるべき諸特質を明晰にしている。

著者によつて示されている生活様式としてのいわゆる西歐デモクラシーの原理的な特徴とは、次の如きものである。(一)合理的經驗主義 (rational empiricism)、科學、社會、政治におけるアプリアリな知識とか眞理を排除する。(二)國家、民族、階級というような概念をではなく、西歐的傳統に根差している個人主義を強調する。(三)國家自體を目的と考へるのではなく手段と見做す。(四)諸種の社會集團を構成する自主的態度 (voluntarism)。(五)古典的リベラリズムに示されるように、國家と社會との區別、それ故に國家の法の背後により、高次の法があるとする見解。(六)目的實現のための手段を強調し、兩者を分離しない。(七)人間關係における討論と同意にある問題解決。(八)人間の基本的平等の主張。以上のようなアスペクトが表現されるためには、政治的デモクラシーの優位が示されねばならず、それに必要な條件として、政治的自由と民主的な制度を維持して、こうとする人民の意志がなければならぬことはいうまでもない。しかしこうした生活様式は、人間の行動様式からすれば『自然的』なものというより寧ろ、それを矯正すべく重ねられた努力の賜物なのである。したがつて民主的な制度や實踐にとつては、『民主主義的パースナリティ』の育成がその根底をなしているといつて過言では

ない。

だが現代のわれわれが出會つてゐる重要な問題といへば、かつてミルが『自由論』において警告を發した諸困難が顕在化してきたといふこともさることながら、全體主義運動の擡頭と關連して、個人の自由を留保しながら同時に國家の安定性を強化していかねばならない點である。アメリカにおいては、革命運動を抑制するスミス法 (the Smith Act) をはじめとして、最近の大統領によつて規定された國家安全の諸方策、更には國民のあいだの同調性への傾向、そしてまた一九五〇年代の初期から高まつてきたマッカーシズム、これらの個人の自由に對する諸制約を、われわれは見逃がすこととはできないのである。勿論、それらは緊張の時代の一時的な現象であるといわれるけれども。

デモクラシーについてこれまで多くの言葉を費してきたが、續いて著者は、民主主義の諸理念と相即して、否、歴史的にはそれよりも先んじて、西歐諸國の生活様式として發展してきた資本主義の古典的な諸原理、それが直面している現代の諸緊張、資本主義文明のもたらした利點について述べ、最後にその現代的なかたちとしての福祉國家に言及している。福祉國家の政策は幾多の社會立法によつて成功を収めてゐる。エーベンシュタインは、アメリカの資料を用いてこれを説明しているが、その一つとして經濟的不平等に對處する課稅政策の圖表を参照してみても、アメリカの富の分配が均等化に向いつつあることが窺える。かくて福祉國家は國家の統治機構の基本的形態を變更することなく、市民の自由と安定を強化し、デモクラシーを強化してきたといえるのであろう。

五

最後の章 民主主義的社會主義 (democratic socialism) は、イギリス労働黨を中心とする社會主義を考察している。エーベンジュータインが指摘しているように、社會主義とは近代産業資本主義の結果として發生してきたものである。共產主義が産業革命のインパクトを體驗する以前の諸國に起つたのに對して、民主主義的社會主義は、それ以後に可成りの自由主義的制度的下に産業化が推進された國に發展してきた。その經濟組織の目的についてみれば、ファシズムや共產主義が強制、命令によつて國家權力の擴充を計る (command economics) のと對照して、社會主義は、自由、福祉、幸福のために、資本主義の諸矛盾を調整していこうとする (welfare economics) のである。またそれは、資本主義に敵對しているのではなく、「労働と所有との統一を保持する」ことについてみても、それは資本主義から受け繼いだ基本的目標の一つであることは明らかである。このことはまた、資本主義の初期の段階における労働と所有との古典的調和を回復することについてもよい。「ロック以來變化したことといえば、單に労働の技術的性格なのであつて、その倫理的内容なのではない。資本主義の論理が個人の労働に對して個人の財産を要求するものとすれば、社會主義の論理は、集團的労働が經營の唯一の可能な形態であるとするれば、集團的労働に對する集團的所有を要求する」といわれる如くである。

次いで、ロバート・オーエンの思想的立場に一瞥して、社會主義と民主主義の親近性、社會主義と共產主義の背反性を論じている。

紹介と批評

ここには次の言葉を引用しておきたい。「彼等のドグマに囚われの身となつてゐる共產主義者たちは、階級と階級對立によつて思考しうるのみである。社會主義者たちは、議會主義の多數決によつて思考することを學んできている」と。

では、社會主義者の教義とはどのようなものであろうか。これまでのイギリスの社會主義運動に示されてきた思想をまとめて見ると、凡そ次の要素が指摘される。第一に宗教的性格——十九世紀のキリスト教的社會主義の影響、および非國教主義Nonconformityの宗教的傳統はイギリス労働組合活動に深い影響を及ぼしている。第二に倫理的・審美的イデアリズム——ラスキンやモリスなどの思索や批判精神に裏づけられている。第三にフエビアンFabian的經驗主義——その漸進的プログレスの思想はイギリス社會主義の中軸をなしていることは言を俟たない。第四に自由主義——自由黨に取つて代つた労働黨は、保守黨とともに、個人の自由を尊重する態度に貫かれている。

一九四五年七月五日の普選の結果、労働黨内閣が成立してから、所期のプログラムが實行されていつた。その産業國有化問題にしても、イギリス民衆は一般的に賛成している。そして現在、保守黨に引き繼がれた政策も労働黨のそれと大差はなくなつてきているのである。著者は最後に、國有化の問題點について、その *statism* の危険性を避けるために、協同組合、労働組合、その他公共團體による所有、つまり社會化 (socialisation) 政策がより望ましいとし、そして今日の社會主義は、諸種のプログラムを實現してきたのであるから、政治的リベリズムがかつて遭遇せざるをえなかつた自然消滅にも似た運命におかれてゐる、と述べている。

六

以上が本書の内容の要約である。ここには主要な項目を追うに止めざるをえなかつたけれども、著者の論點は十分に傳えることができたことと思う。われわれは、本書の簡潔な、そしてまた分り易い表現に助けられて、現代のイズムの輪廓をしつかりと刻みつけられるであらう。

二十世紀における政治思想は、結局において、エーベンシュタインによつて示されているように、「侵略的な全體主義と自由なる生活様式との鬭争」という大きな二つの流れをなして對決している。このように現代の状況をモルフオロギッシュに把握してみることは正しい。しかしながら、そのいずれを選ぶべきかという程、問題は單純なものとは思われない。二十世紀の政治思想の流れは前世紀に始源をもつており、しかもそれらは、デモクラシーが解決すべくして解決しえなかつた諸問題に對して、實踐的政治運動として展開されつつ今世紀に持ちこされてきたものである。共產主義はともかくとして、ファシズムという悪しきまな全體主義運動にしても、それはただ單なるわれわれのプリファレンスの問題とはいえない。また一方デモクラシーをみて、近代テクノロジの發展と照應して、その古典的な私たちは變質過程をたどつて、今やいわゆるマス・デモクラシーとして現われてきた。現代のペースベクティヴに立つわれわれの課題は、《あれか・これか》という性急な決斷を下すことよりか、こうした諸問題が発生してきた根底を歴史の過程の中に探索し、その内的問題關連を究明していくことにあることはいうまでも

ない。そのような研究は、恐らく浩瀚なる著述たることを要するであらう。

勿論、そうしたことの深い研究成果をこの小著に期待することは無理であるが、本書は、エーベンシュタインの豊かな才能と知識を以てしてはじめてなしうる優れた導きの書であるといえよう。

おわりに、本書の一九五四年の第一版とここに使用した第三版とは、内容に修正はほどこされていないが、ソヴィエトに關する敘述に資料の入れかえ（二九頁）と、マレンコフの名をフルシチョフに書き改めているところが數カ所あることを附記しておく。

（奈良和重）